

みんなで建てよう「ビハーラ」

# がん患者・家族語らいの会

## 通信

【No.210】

2019年9月14日発行



9月のがん患者・家族語らいの会の会場は「講堂」です

秋のビハーラ旅行会 9月30日(月)～10月1日(火)

---

## 「私の看護師道」 ～今日の喜びを見つけるために～

藤井 昌美（看護師）

---

私は昭和 61 年に共済病院に入職し、父の癌の終末期にあたり退職、伊東市へ転地して父の死後療養していたその病院に勤務しました。

子どもがまだ小さかったのですが喘息が酷く入退院を繰り返していました。伊東市には小児科が無く熱海市まで通院していました。それも限界があり関東に戻り一般病院に勤務し訪問看護師になりました。

ケアマネジャーも経験し現在は同グループの老人保健施設で勤務しています。

### 〈事例 1〉

はじめの共済病院では産婦人科を希望して勤務しました。看護師は主に婦人科を担当しますが、ほぼほぼ婦人科の癌の方が多かったです。手術を終えられ化学療法をされると経過が長く年単位でお付き合いする患者さんも多くいました。

中でも印象深い方はご主人と二人暮らしで子どもはいない、統合失調を抱えながら子宮癌の末期の方でした。

コミュニケーションがやや取りずらいのですが何故か私を気に入ってくれて、嫌いなシャンプーをして差し上げるととても喜んでくださいました。喜んで頂けると私も張り切ってシャンプーを

します。

患者様とのコミュニケーションは言葉だけではなく、相手に心地よさや安心感を持ってもらえるボディータッチが必要だと思っています。

先日も老健で腰痛の方に痛み止めの軟膏を塗った後「手が優しい、真綿で触られているみたい」と言われ嬉しく思いました。ただ薬が効きますようにと願って行ってただけですのに。

かの婦人科の癌の方との穏やかな日々が続きましたが、とうとう最期の日、私は夜勤でした。当直はその方の大好きな主治医の先生でした。すでに意識はなく呼吸も弱い、心電図でも今すぐ心肺停止しそうに不安定でした。

ご自宅が病院のすぐ前なので朝 4 時頃主人に電話し「今いらっしゃらないと間に合いませんよ」と伝えた所、「任せるからいいようにやって」との返事でした。

それ以上は強要する事もできず、いよいよの時は主治医と私で両方の手を握り心電図の波形が平坦になるのを確認しました。二人とも目には涙が浮かんでいました。

その後のお清めは私一人で行いましたがありがたいと心を込めて行いました。いわゆる「死後の処置」ですが現在はエンゼルケアともいわれています。

忙しい勤務中の死後の処置は時間を取られるため、ぞんざいに行う看護師もいます。私はそれは許せません。

たとえ命が消えてもその方の大切なお体なので、丁寧に声をかけながら扱い衣服や腕の位置も綺麗に整えます。お顔

は熱いタオルで蒸しオイルを塗って自然なお化粧を施します。それはその方の肉体の完結の一環で今までの人生そのものだと思っています。私はエンゼルケアに立ち会えることを喜びに感じます。

私にはあまり死への恐れや不安は感じません。それは婦人科の癌患者さんとの長いお付き合いと自然な死を経験したからではないかと思えます。

### 〈事例 2〉

父は大腸癌で比較的早期に発見され私の勤める病院で手術を受けました。手術後担当医は「取り切りました。90%大丈夫でしょう」とおっしゃいました。

しかし数年後に肝臓に転移が見つかりました。そこから父の闘病生活が始まりました。看護師としての変則勤務、結婚出産、離婚等で父とはなかなか関わらず、看病は母が一人で担っていました。

病状が悪化し、いよいよ先が見える状態の時、職場に介護休暇を申請しましたが断られました。しかしどうしても最期は父の傍に居たく職場を辞めました。

伊東の国立病院に父は時々療養で入院していましたが、半分錯乱していて点滴棒を支えに病棟内を徘徊し、看護師さんに会うと「娘の昌美です。これから勤めるのでよろしくお願いします」と言って回っていました。

ぎりぎりまで在宅で過ごしましたが当時は訪問診療や訪問看護はなく、父が呼吸苦を訴えた時点で再度国立病院に入院しました。

お願いして入院させてもらったのに母と私のお願いは何もしないで欲しい、

ということでした。

病院は病気を治す役割で成り立っています。何もしないわけにはいかないはずですが。しかし田舎の病院だったので許されたのでしょうか。微量の酸素吸入だけで点滴も尿の管も入れずにいました。

また父は入浴が好きだったので看護師さんにお風呂に入れてもらう事をお願いしました。お風呂に入ったら死んでしまうかもしれないと言われましたが、二人とも構いません、お願いします。と言っていました。

入浴後の父はとてもリラックスした表情でした。この経験から死に対して何もしないで迎えるという思考が確立したのだと思います。

訪問看護師になり、それまでは臨床の看護をしてきて、在宅は晴天の霹靂でした。しかし癌の終末期の方も多く出会いましたが、高齢の老衰の方も多くより死は自然でその方の完成だと思えるようになりました。

### 〈事例 3〉

訪問看護時代で印象深いケースは出逢って2日でお別れした方です。30代の女性で癌の末期でした。子どもが二人いて妹は身体知的障がいがあります。小学校高学年のお兄ちゃんが通学の手伝い等の面倒を見ていました。

同グループの病院からの訪問看護の依頼で事前にそこまでの情報は得ていました。退院されたその直後にそうそうに訪問しました。

正直驚きました。元々の体格の上に全身がむくみかなり巨漢で自分で動くの

もままなりません。当然排泄はオムツです。状态的にもいつ急変してもおかしくない状態です。オムツ交換は誰がするのか尋ねると小さい声で「お兄ちゃん」と言いました。

この様な状況でなぜ自宅に帰ってきたのかはわかりません。しかしあまりにも悲惨で私は「病院に帰る？」と聞きました。彼女は首をかすかに横に振りしました。返した私の答えは「そうだよね。病院は嫌だよね。」でした。すると彼女ははっきりと笑顔を見せてくれました。

多くの看護師はこの状態は受け入れがたく強制的に病院に戻したのではないかと思います。しかし私は何か彼女の決意のようなものを感じ今の状況を受け入れました。帰りの際にお兄ちゃんに私の連絡先を教え何かあったら何時でも連絡するように言いました。

翌日です。少し早めに出勤した私の緊急用の携帯が鳴りました。お兄ちゃんからです。「お母さんが起きない」と言いました。私は直ぐに行くから待っててね」と言い、自宅へ向かいました。

真っ先に彼女の様子を見に行くと既に亡くなっていました。妹は既に学校へ行っていて不在でした。隣の部屋でじっとしているお兄ちゃんに話しました。お母さんはもう亡くなっている事。これから君たちの事を考えなくてはいけない。泣きじゃくるのかと思っていたのですが、何か殻に閉じこもったような表情だったのですが、お兄ちゃんはどうしたいと聞くと「妹と二人でいたい」と言いました。その時は本音を言っている表情でした。

生活保護を受給していたので、まず保護課に連絡、訪問診療医に死亡確認の依頼の連絡をして、死後の処置を行いました。保護課の担当の女性に障がいのある妹がいる事、面倒はお兄ちゃんがみている事、お兄ちゃんの希望は二人で居たい事を伝え、家を後にしました。

後日、保護課の方から連絡があり、兄妹は無事同じ施設に入った事を聞きました。私はケアマネジャーの経験もあり、人よりも行政機関の役割や制度を知っていたからこそできた対応であったと思います。

彼女と出逢ったのは偶然ですが、必然とも感じました。兄妹を無事一緒に出来て、また彼女の望む死の方に添えられたのであれば良かったと思います。

今、私の勤める介護老人保健施設は最小限の医療もありますが、主に生活の場です。その為、介護士も看取りがとても上手です。利用者に寄り添い苦痛の無いように配慮しています。もちろんエンゼルケアも抜群です。

このような経験を通して私がこだわる看護とは、介護施設、在宅における療養の援助と死に逝く患者の「よりよい死」へのスピリチュアルな看護の提供、生から死までのケアで私自身のアイデンティティを形成し生死観を確立する事。

またエンゼルケアの意味や技術を後輩看護師に伝えていく事です。

そして今、私が大切にしている看護は、その人の尊厳、意思、こうありたいという思いに添い達成できるように協力する事です。



#### 〈事例 4〉

ある医師の言葉です。「与えられた生を全うした末に仏になるのであれば、修行が足りない人生であっても悟りの度合いはどうあれ許されるものかもしれません。その意味で成仏を迷わせるような医療を終末期に行うことは、医師として避けたい。安らかな人生を終末を迎える上で役に立つ医療を行いたい。」

看護師は医師よりも身近に医療のお世話をする立場です。どんな時も療養者が安心して過ごせる環境を作る事が腕の見せ所だと思っています。

忘れられない事例です。その方は多発性脳梗塞で老健で療養していました。嚥下障がいと失語症でコミュニケーションの取りにくい、胃瘻の患者さんでした。

頑固というか気丈な女性で転倒を繰り返すので目を離せませんでした。経管栄養中に気がつく、一人で洗面台に立っているような人でした。私は安否を守る為にきつく注意することもありましたが、終盤は諦めました。彼女の根性に負けたのです。怒られてもやりたいことをするポリシーに負け、とことん付き合うことにしました。

限られた彼女の終末はだんだん近づいてきました。頻繁に外出を娘様が希望されていましたが、今回の外出はさすがにこの状況で外出したら、その場で死んでしまうかもしれない、でも娘様は何かのイベントがあってお母さんを連れて行きたいと外出して行きました。

施設に帰られてからはぐったりと弱々しく、自ら動く事もできない状態でした。私は彼女に死が迫っていることを

悟りました。

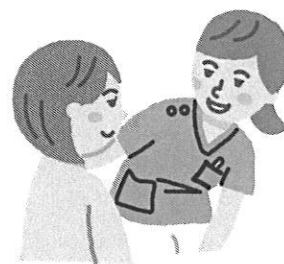
数日彼女は頑張ったのですが、私が2日勤務が休みの前日に意地っ張り同士、お互い散々本音で戦った彼女に掛けた私の言葉は「私に黙って死んだらだめだよ。あさって来るからね。」でした。

2日後出勤すると死期は近くてもいつも通りの様子でした。しかし徐々に呼吸が弱くなり、娘様へ連絡を入れ「最後です。来てください。」と依頼しました。

そして彼女のそばに行き乱れた顔を温かいタオルで拭き思いを込めているうちに私の手の中で呼吸を止められました。「もうすぐ娘さん来るから頑張ってください」と声を掛け続けましたが、潔くお別れになりました。

その後、到着した娘様に状況を話すと「あなたに看てもらえたのね。よかったわ」とのお言葉をもらえました。それまで必死だった娘様もはればれとした表情で着せてあげたかったという花柄のブラウスを着て飛び立たれました。

そこにやはり私はスピリチュアルなものを感じます。私との約束を守るように亡くなっていった事、何故か今の職場にいる名前が同じ患者さんに何故か優しくしてしまう。なんで私はこの患者さんに思い入れがあるのかと想着いたら、亡くなった彼女と同じ名前だったのに気づいたのです。それが人と人とのつながりなのでしょ  
うか。それを感じとれる感性がある  
うちは私は看護師をやめられないのだと思います。



# 傾聴すること

会員 種村健二郎

30年に近い昔のこと。イギリス生まれのアメリカの看護師さんが講師になって「がん終末期の医療ケア」の講習会があった。参加者のほとんどは看護師だったが、真剣な熱気に溢れていた。医師はケア関心のない時代だった。英語の話せない私は同時通訳の日本語だけが頼りだった。翻訳が分かり辛い。分かりやすく話される通訳の言葉は、心の底から嬉しかった。

不意に、その頃に学んだことを思い出すことがある。本当は、その時に学んだと勝手に思っているだけなのかも知れないけれど。だから、嘘っぽい御伽噺になる。でも、私にとっては真剣なのだ。

## 傾聴すること

傾聴のこともその時に学んだ。たぶん、「寄り添い」と「治療的な関わり」の違いの説明のなかに出てきたように思う。

Not doing, but being.何かをすることではなく、そこにいることだという誰でも今は知っている言葉も、当時は新鮮にきこえた。

傾聴する Active listening も、心理学やカウンセリングなど知らなかったがん治療医師には新鮮に響いた。「人の話すことを聞くこと、聞いていることだけでその人に対する尊敬の気持ちを表わしています。みなさんも尊敬している人の話は聞きますよね」と言う。「でも、聞くだけでは Active listening ではありません」と言い、3つの要素を付け加えた。

評価しない。一つ目は No judgement です。良い悪いと自分の評価基準に乗せて判断しないということです。

後になってから、聴く人が評価するのはその人の価値観だから、傾聴する人は自分の価値観を知らなくてはならないと言われていることを知りました。自分の価値観を知ることは難しい。

二つ目は、共感する Sympathy です。悲しみを共に悲しみ、喜びを共に喜ぶってことです。「うん、うん」

って、一緒にいることです。最近、ロボットを研究している人が「ロボットが絶対にできないこと」に挙げて、ちょっと注目。

三つ目は、Coherence と言ったのです。「一定、定まることです」と。

会場が「む・・・」と理解できない雰囲気になっていたのを感じた講師が「cohere」「今ここ」のことだと加えたのです。

それでも意味が分からず、私は勝手に「信ずること」と誤理解してしまいました。

まとめると、傾聴することは、評価しないこと、共感すること、信ずること、この3つ事を同時にすることなのだ。

傾聴するは、「自分を見つめること」だった。

## 多聞という仏様

四天王のことは、大須賀先生に学びました。四天王がそれぞれ、傾聴する（多聞天）、評価しない（広目天）、共感する（増長天）、定まる（持国天）に当てはまるように考えられるというのです。興味津々でした。北から多聞天、広目天、増長天、持国天と仏国土の四隅を守っております。

大須賀先生は『ひびきあう心』という著書のなかでそのことの気づきの感動を「多聞天の前に立ったとたん『これはまさにアクティブ・リスニングだからいのちを守るんだ』と、はっと思ったんですよ」と書かれ、その後に研究し深められました。

そして、驚くのはキリスト教にも同じように神の国を守っている守護神がいて、動物で描かれているというのです。

傾聴するは、どんな小さな音でも聞き逃さないライオンです。評価しないは、空高く舞い上がってどんな小さなものも見通すイーグルです。共感するは、どこまでも一緒の人間です。最後の、定まるは、乳を与え労力を提供し、最後は肉になり、皮を与える牛ということです。

傾聴するは、「いのちが存在するための最初に守られる大切なこと」なのかも知れません。

## 【本の紹介】

民衆宗教を探る

# 阿弥陀信仰

蓮池 勢至 著（慶友社発行）

〈著者プロフィール〉

真宗大谷派長善寺住職

同朋大学仏教文化研究所客員研究員

愛知県史調査執筆委員



プロローグ―浄土への幻想と現実  
第一章 仏壇の阿弥陀如来と行事  
第二章 往生と阿弥陀信仰  
第三章 阿弥陀絵像の民族  
エピローグ―日本人の阿弥陀信仰とは

筆者の蒲池氏は、結びに次のことをお話されておられます。

### エピローグ―日本人の阿弥陀信仰とは

・・・それでもなお、問わねばならない。阿弥陀とは何か、阿弥陀信仰とは何か、と。彼岸に阿弥陀を求めるにせよ、現実に阿弥陀を求めるにせよ、阿弥陀信仰とはこの「私」が救われることである。仏道を歩む者にとって、生きることも、死ぬことも、すべてが阿弥陀のなかにあることなのであろう。

世界遺産で知られる五箇山の赤尾（富山県南砺市）で一生を送った道宗は、みずからの阿弥陀信仰を「道宗心得二十一箇条」として残している。文亀元年（1501）12月24に思い立って書き記したのであった。その第21条に次のものがある。・・・

（原文略）

あさましいわが心よ、後生の一大事を遂げることができるならば、一命をかけてもよい。善知識の仰せならいずこのはて、唐・天竺へまでも仏法を求め尋ねていく、そこまで覚悟を決めている。そして、そんな自分の覚悟に比べてみれば、如来の仰せにしたがって一心一向に法義をたしなむことは、たやすいことではないか、よく考えてくれわが心よ、今生は一端の浮生、いつまでもおれる世ではない、たとえ飢え死んでも凍え死んでもかまわない、どうか後生の一大事を油断してくれるな、わが心よ、かえすがえす、いま申したところに違えることなく、わが身を責めてたしなみぬいてくれよ、どこまでも御掟・法度にそむかず、内心には一念帰命の信心のたのもしさ、ありが

たさを持ち、外の相には深く慎むようにしてくれ、わが心よ、

道宗は蓮如に帰依した真宗門徒であった。五百余年前、山深い五箇山の地にあって、一命をかけて唐・天竺までも仏法を求めていくという。どこまでも如来の仰せに従うという。「今生は一端の浮生、いつまでもおられる世ではない」と述べ、現世を相対化して否定している。現世を否定するとは、現実に生きている「私」をも一度、否定することなのであろう。それは、「私」も、「私の死」をも超えて阿弥陀に出遇ったからこそ言い切ることができたのではないか。・・・阿弥陀信仰には、時代と社会を超えていく、権力を相対化して現実を否定し超えていく力があつた。・・・

最後に、現代における阿弥陀信仰はどこにあるのであろうか。現代にあつても、人間であるかぎり、人はかならず死ななければならない。しかし、葬儀は葬祭業者に委ねられてしまった。葬儀壇に阿弥陀絵像が本尊として安置されていても形ばかりで、家族や参列者は位牌や遺影に向かって拝んでいる。家族葬や「孤独死」「無縁死」も多くなった。「往生」は完全に死語となり、臨終行儀は意味を失った。「死」の意味は失われ、世俗化した「私の死」になってしまったのであろう。寺院や仏壇を中心とする阿弥陀信仰も同じである。死者を弔い、先祖を祀る祖先信仰はいまなお生きているが、阿弥陀信仰は日本人の祖先信仰を否定するのではなく、超えていくものではないか。

【編集後記】 ●『阿弥陀信仰』第二章「往生と阿弥陀信仰」のまとめで、著者の蒲池勢至氏は『歴史的に遡って往生と臨終行儀という、死に関わる阿弥陀信仰の様相と展開を追求した。阿弥陀の「浄土」に対してもそうであるが、人間は阿弥陀如来にどう向き合い対峙してきたのであろうか。一つには、阿弥陀を自分の現前に見ようとする「見仏」の信仰であった。』とおっしゃっている。 ●「見仏」が、人間の側から阿弥陀如来を見ようとする「自力」であるのに対して、法然聖人・親鸞聖人は「本願他力」を説かれました。 ●続けて、蒲池氏は『阿弥陀から人間を見ようとした阿弥陀信仰が生成してきた。「有相の阿弥陀」から「無相の阿弥陀」への転換であって、人間であるこの「私」にはたらしかけているという展開であった。阿弥陀が「南無阿弥陀仏」になったのである。救済とは、光明によってみずからの無智が破られ、新しい境地が開かれることであった。これが「阿弥陀に遇う」ということでもあった。』 ●江戸時代、念仏禁制であった薩摩藩では、浄土真宗に帰依していることがバレたら、重刑に処せられていました。 ●だから、門信徒は、隠れて念仏をしていました。 ●そんな中、日中でも、他人の目を気にせず、阿弥陀さまに手を合わせる場所がありました。 ●それがお墓です。お墓参りを装い、ご先祖や親しかった方に詣っているようで、実は、阿弥陀さまを拝んでいたのです。 ●その名残が、お盆・お彼岸でなくても、一年中お墓のお花が絶えない鹿児島風景になっているのです。 ●しかし、現代において、浄土真宗のお仏壇のあるご家庭でも、お名号か阿弥陀如来絵像のご本尊がご安置されていても、隣には位牌や写真が置かれています。 ●阿弥陀さまを信仰しているのか、ご先祖（ホトケ）を崇拝しているのか、意識もなく、形骸化しているのが現実です。 ●そして、私が阿弥陀さまを、ホトケを供養してあげていると思込んでいます。 ●夏はお盆を迎え、また原爆・終戦の記念でもあることから、近しい方親しい方を偲ぶことであります。 ●生きている者が、亡き方を悼み偲ぶことは、私の側から仏さまを見ようとするのかも知れません。 ●しかし、そのことを通して、実は、亡き方々が、仏さまと成って、それぞれの生前の情（生きている側の思い込み）を超えて、いつも傍に居て、「南無阿弥陀仏」と、はたらき続けてくださっていたと、あらためて、味わわせて頂くご縁と窺うことであります。 （北村）

ビハーラとは 「安らかな」「くつろぎ」「安住」「お寺」などの意味を持つサンスクリット（梵語＝インドの古語）で、「ホスピス」に代わる仏教語です。この「ビハーラ」を、みんなで力を合わせて、つくりたいと願っています。

## 【がん患者・家族語らいの会 例会予定】

毎月第2土曜日 午後1時30分より

会場：築地本願寺

2019年9月の例会：9月14日 会場：講堂

※講師：成田 智信 氏（宗教法人善了寺代表役員）

※講題：「お寺のデイサービスの現場から学んだこと

～現場から教学を問い 教学から現場を問う～」

内容：「還る家ともに」に込めた思いから、今日までの実践で気づかされたこと、学ばされたことをお話いたします。

講師プロフィール：宗教法人 善了寺 代表役員

通所介護事業所「還る家ともに」代表役員

本派 東京教区 鎌倉組 善了寺 住職

2019年10月の例会：10月12日 会場：講堂

\* 講師：村松 静子 氏（在宅看護救急センターLLP 代表）

\* 講題：「`自主逝、の心」

2019年11月の例会：11月9日 会場：瑞鳳

\* 講師：志茂田 典子 氏（ACURE 研究所所長）

\* 講題：最後の時の自分の想い

～「もしバナ」ゲームを通じて知る心の声～

## 【がん患者・家族語らいの会通信 No.210】

2019年9月14日発行

編集者 北村 信也

発行者 北村 信也

発行所 東京ビハーラ がん患者・家族語らいの会

〒104-8435

東京都中央区築地 3-15-1 築地本願寺内

TEL/FAX 03 (5565) 3418

## 【東京ビハーラ電話相談】

☎03-5565-3418

（毎週月～金、14：00～17：00）